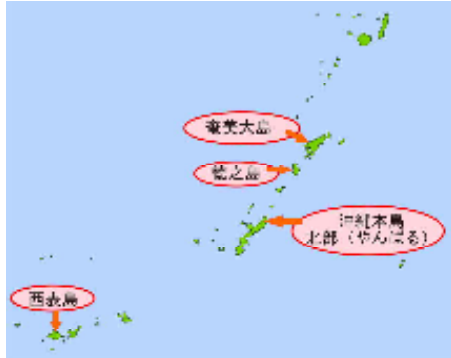


## 世界自然遺産を目指す奄美大島

『常田 守写真展』担当 金井 賢一

2013年1月末、奄美大島と徳之島は、沖縄本島北部（やんばる）・西表島とあわせて、「奄美・琉球」という枠組みで、世界自然遺産の暫定リストに登録され、正式な国内候補地となりました。これを受けて鹿児島県では様々なシンポジウムや講演会などが開催されています。皆さんもこのような会合に参加したことがありますか？

世界自然遺産に推薦されたのは、各島の山地にある亜熱帯多雨林です。



「奄美・琉球」の  
世界自然遺産候補地

2014年5月現在では、まだ明確な線引きをしたエリア図が示されていませんが、奄美大島南部の森や徳之島中部の森、やんばる、西表島の中部などが候補と考えられます。

世界遺産に登録されるにふさわしいかどうかは、いくつかの分野で顕著さが重要です。奄美・琉球の地域は「固有性」と「多様性」が認められました。

多くの固有生物が奄美大島に分布しているのは、この島のたどってきた歴史に起因します。ユーラシア大陸の東の端だった頃、ここには大陸と共通の生き物がすんでいました。しかし、海水面が上昇するなどの理由で奄美大島を含む琉球弧の島々が大陸から分断されたことにより、多くの生き物は大陸との行き来ができなくなり、取り残されました。そのおかげで、大陸ではすでに絶滅した生き物が琉球弧に生き残っていたり、島の中で独自に進化を続けて別種になるなどして、固有種が多い地域となりました。

たとえばアマミノクロウサギは、大陸にはよく似た種類の化石を見ることができますが、現在では奄美大島と徳之島にしか見ることができません。イシカワガエルは奄美大島

にすむもの（アマミイシカワガエル）と、沖縄島にすむもの（オキナワイシカワガエル）というように、別種となる進化を遂げました。

多様性とはさまざまな生き物が同所的に生活していることです。これは外来種のように近年持ち込まれた生き物を意識していません。長い歴史の中でその土地ごとに、そこにすむ生き物どうしが関連しながら生活してきた「今」を尊重しています。奄美に生える植物は、この島にすむ昆虫たちが

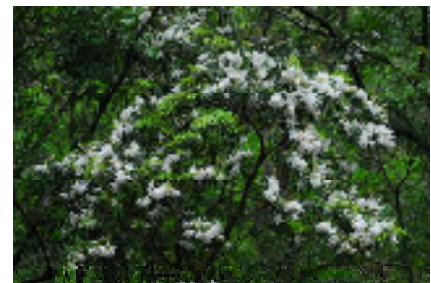


アマミノクロウサギ  
(撮影：常田 守氏)

が花粉を運ぶことで種子を付け、子孫を残してきました。またハナバチやハナアブたちも、奄美大島に生える植物の花を相手にして、ミツや花粉を手に入れてきました。お互いに関係し合っただけでその地域の世界を作り上げてきた歴史を持っています。これが「生物多様性は大切なもの」と呼ばれている理由です。

生物多様性は歴史的な価値だけではなくありません。これらの生き物がいるおかげで、畑の作物も実を付けてくれます。人が自分で花粉を運ぶのは、とても大変です。また、これらの生き物が生活している環境そのものが、観光などの素材として人間に恩恵を与えてくれます。

「奄美・琉球」地域が世界自然遺産に登録された際には、この固有性と多様性を保ちながら、観光客の受け入れなどを成功させなければなりません。難しいですが、夢のある事業となるでしょう。これを成功させることで、次世代に奄美の自然を残すことができます。



アマミセイシカ（ツツジ科）  
(撮影：常田 守氏)

「奄美・琉球」地域が世界自然遺産に登録された際には、この固有性と多様性を保ちながら、観光客の受け入れなどを成功させなければなりません。難しいですが、夢のある事業となるでしょう。これを成功させることで、次世代に奄美の自然を残すことができます。